第17回

事件記者・徳さんの 酔いどれ取材メモ

どーも、1年ぶりのご無沙汰、酒好き事件記者の酒匂徳利（さかわのりとし）です。COVID-19により情報収集の場である酒席が次々とキャンセルされ、ネタ枯れ状態が続くが、〝徳利の徳さん〟は携行用の除菌アルコールを鞄に忍ばせ、しつこく酒がらみの事件を追い続ける。それが愛する酒への恩返しだと思うから。断っておくが、事件を嗅ぎ分ける臭覚が衰えているのは、感染したからじゃないからな。

♥ ♣ ♠ ◆

警察関連でいえば、コロナの影響で戸惑ったのは飲酒検問の現場だった。コロナ禍でも飲酒検問の手を抜くことはできない。これまでは警察官がクルマの窓や運転手に近づいて呼気や車内のアルコール臭を嗅ぎ取っていたが、運転手も警察官もマスク着用で酒の臭いの判別がしづらくなり、飲酒感知器をその都度、消毒をしなくてはならない。アルコールを感知する機器である以上、アルコールで除菌するわけにはいかず次亜塩素酸を用いている。埼玉県警では運転手と接近せずに検問ができる長さ15センチほどの新型飲酒感知器を導入、検問を強化した。

繁華街に繰り出す客は減ったから飲酒運転も減っただろうって？　確かに飲食店帰りの飲酒運転事故は例年の2割程度に止まっているが、宅飲み途中に酒やつまみを買い足すため「ちょっと近くのコンビニへ」と安易に運転するヤカラが目立っている。しかも、外出自粛によるストレスも加わり、宅飲みは深酒になる傾向があり危険度は高まっている。

さてと、それでは酒がらみの事件を報告するとしますか。外での飲酒機会は減ったにも関わらず、おバカな酔っ払いによる事件が連日のように報告されている。

まずは佐賀県から。10月16日午後6時頃から開かれていた佐賀県県民環境部の懇親会帰りの30歳代の男性係長が酒に酔って駐車している車を蹴飛ばし、器物損壊容疑で現行犯逮捕された。第3波前とはいえ、コロナ禍で自粛が叫ばれているなかでバーやカラオケ店で2次会、3次会を開催していた。

10月28日、大阪府警の単身寮に住む女性警察官の部屋に侵入したとして、第一機動隊の20歳代男性巡査を住居侵入容疑で書類送検。府警は減給6カ月の懲戒処分にしたが、巡査は容疑を認め依願退職した。巡査は酒の酔いに任せ、寮内の女性専用階に入り、ベランダから手すりを伝って隣の部屋のベランダに移り覗き見たという。

11月1日、千葉県館山市の路上で面識のない男性会社員を背負い投げし、首の骨を折る重傷を負わせた疑いで同市消防署の消防士長（32歳）を傷害容疑で逮捕。飲食店でケンカになり、仲裁に入った男性を「いきなり胸ぐらをつかまれて腹が立った」として投げ飛ばしたという。

11月4日、山口県立高校の60歳代の臨時教諭が、飲酒運転で県道のガードパイプに激突。「（前日の）酒が残っているとは思わなかった」と容疑を否認。

翌5日、JR大阪環状線西九条-弁天町間を走る電車内で40歳代の女性の尻を触った疑いで池田署の巡査長（27歳）が府迷惑防止条例違反（卑猥な行為の禁止）容疑で現行犯逮捕された。非番だった巡査長は昼頃から同僚らと酒を飲んだ後、1人で帰宅中だった。

11月14日、広島県安佐南区役所生活課職員（22歳）が、深夜、自宅近くのアパート敷地内で下半身を露出、通報で駆け付けた警察官に現行犯逮捕された。「逮捕されるような覚えはない」と酔っ払い定番の言い訳に終始した。

11月24日には沖縄県の中学生4人が補導されていたことが判明した。4人は夜9時過ぎに学習塾の自習室に入りこみ、コンビニで購入した酎ハイで酒盛りをした。そのうち1人は救急搬送されたというが、開いた口が塞がらない。

年末年始、飲酒の機会が増えるこの時期、警察も指を咥えて事件・事故の発生を待っているわけではない。沖縄県の与那原署では管内の住民に「お酒との付き合い方、適量の飲酒について各家庭、職場、地域で語り合ってみてはどうか」と呼びかけ、飲酒による事件、事故の現状を資料として各世帯に送付した。

山梨県南甲府署では公式サイト内に「飲酒運転情報提供BOX」を開設、飲酒運転の常習者や運転すると知りながら酒を提供する飲食店の情報を募る。実際、専用ページに寄せられた情報により現行犯逮捕に結びついたケースもある。

イラスト：菊峰志麻